

【341】

| | |
|---------|---------------------|
| 氏名 | 半田良一 はん だ りょう いち |
| 学位の種類 | 農学博士 |
| 学位記番号 | 論農博第380号 |
| 学位授与の日付 | 昭和47年3月23日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第5条第2項該当 |
| 学位論文題目 | 林業生産力に関する基礎的考察 |

論文調査委員 (主査) 教授 岡崎文彬 教授 佐野宗一 教授 菊地泰次

論文内容の要旨

本論文は、林業生産力の技術的構造を論理的、体系的に追求した研究である。

近年の産業各分野における、めざましい技術発展の一環として、林業技術も進展し、専門化した。その反面、分業化によって全体を展望する総合的認識がややもすれば欠ける傾向を生じていることは否定できない。このため本論文は、林業技術の総合的な認識の上にならば生産力を統一の原理として基軸にすえ、この生産力の社会的、経済的現象を法則化することを目標に、全篇を6章に分けて論述している。

まず第1章において、生産力は労働生産性を指向しつつも、自然力が外的制限として存在するかぎり、現実の技術面では労働生産性向上と自然力高度利用の二つの指向があり、発展過程として自然力依存、自然力統御および資本装備充用の三段階に分け得るとしている。

第2章の林業生産力では、林業の木材生産業としてのみならず、森林生産業として把握することの重要性を強調している。

第3章の森林作業法と第4章の保続原則は、後章を詳述する目的にあわせて、従来の叙述を批判しつつ整理したものである。

第5章の林業の資本装備では、投入要素の構成と、投入要素を森林内に定着させるための伝達輸送手段の構成を論じているが、とくに林道の問題を深く掘り下げている。これまで林業技術論の総体的な体系の中で、林道を正しく位置づけた研究がみられないだけに、本章は本論文にとっての重要な部分といえよう。

最後の第6章の林業労働力組織は、労働の存在形態と組織形態を自然力依存度の強い林業の生産力特質との関連において論じたもので、第5章とともに、重要な見解を示した章である。

論文審査の結果の要旨

本論文は、林業生産力の技術的構造を論理的かつ体系的にとりまとめたものである。

戦後、産業の各分野におけるめざましい技術発展に呼応して、林業の技術も進歩し、専門化した。その反面、分業化のために全体を展望する総合的認識が、ややもすれば等閑視される傾向を生じている。たとえば新技術導入の志向が昂揚された1960年前後には、技術論への関心が深まったが、その場合にも林業生産力＝技術論が系統的なものとして樹立されるにはいたっていない。

その反省の上に立って、著者は、林業生産力の発展と技術の進歩が、社会経済条件そのものをどのように変えてゆくか、それを追求して社会法則化することが、林業経済学の本質的な使命であるとしている。ただし、そのためには、基底にある林業生産力に関して体系的な認識をもつことが必須の前提であるとして、6章に分けて論を展開している。

まず第1章の生産力と技術において、生産力は、自然力が外的制限として存在するかぎり、労働生産性と自然力高度利用の二方向を指向せざるを得ず、発展過程については、自然力依然、自然力統御および資本装備充用の三段階に分けて考察すべきことを明快に論じている。

第2章の焦点は、林業を木材生産業としてよりも森林生産業として捉えることを建前として、林業生産技術を秩序づけたところにみられる。

第3章の森林作業法と第4章の保続原則では、基本は従来の叙述に則りつつも、随所に厳しい批判を行ない、これらを本論文中に体系的に位置づけ、整序している。

第5章の林業の資本装備では、投入要素の構成と投入要素を森林内に定着させるための伝達輸送手段の構成に重点をおいているが、とりわけ輸送手段である道路の生産力意義を掘り下げて、林道論を展開している。従来、林業技術論の総体的な体系のなかで、林道問題を深く追求した研究が見られなかっただけに、本章は本論文にとっての重要な部分である。

最後の第6章では、労働力の存在形態と組織形態について、それを自然力依存性の強い林業の生産力的特質と関連させながら、独創的な見解を表明している。

このように本論文は、元来主観的、個別的なものとして標準化されにくい森林の使用価値を、標準化、商品化との関係で分析する方向づけをしようとしたものであり、林業経済学ならびに林業の実際面に貢献するところが大きい。

よって、本論文は農学博士の学位論文として価値あるものと認める。